川端康成作品研究

長谷川　泉編著

近代文学研究双書

八木書店

河村政敏 ①1928年 ②長崎 ③東京大学大学院(博) ④都留文科大学助教授 ⑤「木下杢太郎」「佐藤春夫『美しい町』論」

長谷川 尚 ①1934年 ②千葉 ③早稲田大学 ④TBS報道局特別制作部 ⑤「『比照文学』から『比較文学』へ」

高橋新太郎 ①1932年 ②東京 ③学習院大学大学院(修) ④近代文学研究家 ⑤『現代日本文学大年表』(共著)『近代日本文学論争事典』(共編)

武田勝彦 ①1929年 ②東京 ③上智大学大学院(修) ④早稲田大学講師 ⑤『アメリカのベストセラー』『サリンジャー作品集』(翻訳)

平山城児 ①1931年 ②京都 ③立教大学大学院(博) ④立教大学助教授 ⑤「川端康成の作品と夢の世界」「大伴旅人の作品と生涯」

永丘智郎 ①1918年 ②東京 ③早稲田大学 ④甲南大学教授 ⑤「川端康成の性格表現について」「人間の社会的形成」「ヒューマニズムの心理学」『学生たちの記録』(共編)

川嶋 至 ①1935年 ②札幌 ③北海道大学大学院(博) ④岩手大学講師 ⑤「川端康成論」「川端康成——大正期における批評活動」

千葉宣一 ①1930年 ②旭川 ③北海道大学大学院(修) ④北海道工業大学助教授 ⑤「江戸時代における西洋詩の受容状況」『日本の近代小説と西洋』(翻訳)

守随憲治 ①1899年 ②東京 ③東京大学 ④実践女子大学教授 ⑤『歌舞伎戯曲構造の研究』ほか

三明永無 ①1899年 ②島根 ③東京大学 ④ハワイ・西本願寺教団回教師

川端康成作品研究 <近代文学研究双書> 定価 2,000円

昭和44年3月1日 第1刷発行

編著者 長谷川 泉
発行者 八木敏夫

発行所 株式会社 八木書店
〒101 東京都千代田区神田神保町1-45
電話 03-291-2965／振替 東京 10457

印刷所 奥村印刷 製本所 太刀川製本

©1969 I. HASEGAWA 編著者との協約により検印を省略します

はしがき

川端康成が、日本人作家最初のノーベル文学賞を受賞した。川端康成における含羞の姿勢は、この受賞に際して、主として謙辞のみを語ったかの感があった。川端康成の文学的人間像は、おそらくノーベル賞受賞によって、いささかも変わることなく、またその文学的本質も、いささかの変貌をも示さないであろう。

川端康成とは、そのような作家である。本書はそのような川端文学の本質を究明する最初の体系書として編まれた。

本書は川端文学の神髄に迫るのに、小説作品を主体に凝視の目を注ぎ、そのような視点からのみでは把束できないことがらを概説的な探求をもって補足する構成をとった。

「十六歳の日記」に始まりテレビ・ドラマ「たまゆら」をもって終末としたそれぞれの作品論は、その方法論において一様ではない。多彩な様式をもって、川端文学の本質の究明にいどみ、万華鏡をのぞく思いにさそわれる。

このように多くの作品論をとりあげ、それぞれに重厚な掘りさげを行なった川端康成論は、いまだかつてその比を見ない。二十一の作品（掌の小説群は一括して扱われている）がとりあげられているのであるから、各論考の間に若干の重複が生じている点もある。とくに、最近の川端論において注目をひき、さまざまな角度から照明を与えられている初期の幼い恋愛体験への言及などがそうである。そのほか「末期の眼」や「文学的自敍伝」の記述などがよく引かれ

ていることなどもそうである。川端を論ずるには、思いのほか川端自身の文章が、川端文学の神髄を語っていることの意義の深さとおそろしさのなせるわざである。川端文学が批評を拒絶する傾きがあるのはそのためである。川端自身は、自作について語ることは、自作の生命を限局することになるから好まないと語っているのであるが、川端ほど自作について、余人の手のとどかぬところで、さりげなく、自作の生命の炬火に点火している作家はそう多くはない。ゆえに、川端の作品を論じ、川端文学を論ずる場合に、川端自身のことばに牽引されがちなのは当然である。だが、川端自身のことばに牽引された論者の発言には、微妙なニュアンスの相違がある。若干の重複は、その意味において、むしろ多角的に、川端文学の神髄に迫る複眼を構成する。私はむしろ興味を持って、その部分に注目したことを告白する。

本書は、今日にいたるまでの川端康成研究の成果に支えられ、その集大成の感がある。しかし、そればかりでなく、本書によって新見、創見、未発表のことがらがあきらかにされた点が多いことは、編者としてこの上もない喜びであった。

思い出をしるしていただいた守随憲治・三明永無両氏の文章は、川端康成に親近した友人の筆であるだけに、青春彷徨の川端の一面を浮彫りしている。それらを含めてあきらかにされた伝記的新事実は、そのことの興味を越えて、川端文学味読の貴重な道標になってゆくことを痛感する。

さきに「概説的な探求」としるした第二部は、第一部の作品を理解する背景として重要な項目を拾いあげたものである。川端の文学活動は、小説ばかりでなく、文芸時評や評論・随筆の面においても独自の輝きを発揮した。そして、すぐれた新人を発掘することをしばしばなして来た。そのような川端の文章についての論究は、本来第一部に収めて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もよいものであるが、第一部を小説に限定した関係で、第二部に収めることにした。

本書は、総じて複眼的な構成による川端文学の神髄の究明を意図したものである。一筋縄ではゆかない川端文学の本質を絞りあげるために、搦め手からの論究もある。その微妙な皮膜の間にも神髄は覗いている。

昭和四十三年十一月

長谷川　泉

はしがき……長谷川　泉……一

I　川端康成の主要作品研究

十六歳の日記……長谷川　泉……一三
掌の小説……松坂俊夫……二六
招魂祭一景……長谷川　泉……五三
「伊豆の踊子」論……佐藤　勝……六五
浅草紅団……鈴木晴夫……八四
温泉宿……井上　弘……一〇〇

もくじ

水晶幻想……磯貝英夫…二一
抒情歌……山崎俊介…二七
禽獣……酒井森之介…二三七
雪国……笹淵友一…一四四
女性開眼……日笠祐二…一七七
故園……田中保隆…一八九
「名人」論……羽鳥一英…二〇五
山の音……長谷川泉…二二〇
千羽鶴……高田瑞穂…二三九

みづうみ……赤塚行雄…二五八
「眠れる美女」問答……村松定孝…二七三
「美しさと哀しみと」をめぐって……小坂部元秀…二九〇
「古都」うらおもて……塚田満江…三〇八
「片腕」試論……河村政敏…三二四
たまゆら……長谷川　尚…三三七

Ⅱ　川端文学理解の背景

「末期の眼」から「落花流水」まで……高橋新太郎…三五五

翻訳作品と海外での評価……武田勝彦…三八五
川端文学と古典の世界……平山城児…四〇三
川端康成の文体について……永丘智郎…四二八
川端康成伝の問題点……川嶋　至…四四八
川端康成とモダーニズム……千葉宣一…四六八

Ⅲ　思い出の中の川端康成

無邪気な頃……守随憲治…四九五
川端康成の思い出……三明永無…五〇〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅳ　年譜と参考文献

川端康成年譜……長谷川　泉…五二
川端康成研究参考文献稿……高橋新太郎…五五

I

川端康成の主要作品研究

十六歳の日記

長谷川　泉

川端康成の作品には、一気に成ったものではなく、長い歳月をかけて醸成された作品が多い。分載や連載の作品が多い。名作といわれる「雪国」「千羽鶴」「山の音」などはそうである。

「十六歳の日記」は、数え歳十六歳の時の日記を、後年わずかの補筆を加えて発表したものである。ゆえに原形は川端十六歳の時に、すでに成っていたものである。だが、この作品が、読者に享受されるにいたったのは、初めから現在のような形の作品ではなかった。不動の原形が存しておりながら、その作品が今日のような形に定着するまでに多くの年月を要したということは、そのことがやはり川端的であることを痛感せざるを得ない。

私はここで「現在のような形」とか「今日のような形」ということばを使った。それは全一巻の「川端康成短篇全集」（昭三九・二、講談社）に収められた「十六歳（十四歳）の日記」をさす。この作品の終末には（一九一四―一九四八）とされている文字がある。このことは、川端の数え歳十六歳（一九一四）の時の原形から、その後の補足を加えて、昭和二十三年（一九四八）にいたってようやくこの作品の形が定まったことを示している。その間の経緯を追ってみれば、次のようになる。

原形―大正三・五・四―五・一六の日記、およびその後の日記で日付不明の四枚と四行分

初出―「十七歳の日記」（大正一四・八「文芸春秋」）「続十七歳の日記」（大正一四・九「文芸春秋」）

補足―「川端康成全集」第二巻（昭和二三・八、新潮社）の「あとがき」の一部分で、「十六歳の日記」を解説した部分

以上につき若干の説明を加える。

「十六歳の日記」は、川端康成の祖父三八郎（天保十二年生れ。当時は康籌（やすひろ）と改名）の死床のみとりをする日記である。康籌は大正三年五月二十四日の夜に死んだ。早くして父母や祖母を失い、姉の死をも体験していた川端にとっては、祖父は残された唯一の肉親であった。

大正三年五月四日から五月十六日にいたる日記は、やがてこの祖父の死を時日の問題とする哀切な記録である。五月十六日から二十四日まではわずかに八日間である。初出「続十七歳の日記」の終末には、五月十六日の日記のあとに、傍線を附して「日記はこれでおしまいだ。」として、解説が附されている。この解説の部分は「川端康成短篇全集」文では「あとがき」の文字が附されて附加されている。

そして、さきに「補足」としてあげた「川端康成全集」第二巻の「あとがき」の、この作品の解説の部分は「川端康成短篇全集」文では「あとがきの二」として附加されている。この「あとがきの二」は重要である。なぜならば、川端十六歳の時の日記の二十一枚目と二十二枚目（原文は一枚半と三行で、原稿用紙に書き直したものは、四枚と三行）の原形が発見され附加されているからである。ゆえに「あとがきの二」は単なるあとがきではなく、発見された原形の一部を補足するとともに、その解説を含め、さらに「十六歳の日記」全体のしめくくりの解説の意味をも持たされているのである。

発見された日記原形の二十一枚目と二十二枚目とには日附がない。だが初出の時に発表された五月十六日以降の部分である。「あとがきの二」は『十六歳の日記』を発表した時には、五月十六日までしか見つからなかったのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com